國學院大學学術情報リポジトリ

謝冰心とエレン・ラモット『ペキン・ダスト』：異文化接触における不幸な邂逅

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 牧野, 格子, Makino, Noriko メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000497

謝冰心とエレン･ラモット『ペキン･ダスト』
—異文化接触における不幸な邂逅—

牧野格子

はじめに

1924年８月のある日、中国現代女性作家である謝冰心はある本を手に取った。それは、アメリカのジャーナリストであるエレン・ラモット（Ellen Newbold La Motte,1873–1961）(1)が著した『ペキン・ダスト』（*Peking Dust*（1919））という中国の旅行記であった。謝冰心はページを繰り、読み進めていくうちに心の中に怒りが沸々とこみ上がるのを感じた。西洋から見た中国像に対する怒りであった。

謝冰心は当時アメリカのボストン郊外にある名門女子大のウェルズリー大学に留学していた。1923年９月から修士課程に入り英文学を中心に学んでいたが、同年11月突然、肺の病に倒れた。その後、マサチューセッツ州のブルーマウンテンにあったサナトリウムに入院した。1924年７月サナトリウム退院後、母校・燕京大学の恩師であったグレース・ボイントン（Grace Morrison Boynton, 1890-1970）の実家に迎えられ、ボイントンの家族と共にニューイングランド地方の小旅行に出かけた。旅行から帰り、ボイントンの父であるネヘミヤ（Nehemiah Boynton, 1856-1933）の書棚にラモットの『ペキン・ダスト』を見つけたのである。

謝冰心がアメリカ留学時期に執筆した作品のなかで、アメリカ社会で差別を受けたという記述は殆ど見当たらない。同時期にアメリカ留学を経験し、差別の経験に基づいて「洗衣歌」を発表した聞一多とは違う。これは恐らく謝冰心が『寄小読者』で描いたように、留学してすぐに入院して、手厚い看護を受けたこと、むしろ生死の境をさまよう重篤な病の患者たちとの交流があり、差別的な環境に身を置いていなかったことが考えられる。

さらに、ウェルズリー大学と燕京大学の間で、グレース・ボイントンという仲介者を通して、ウェルズリー大学の教授たちも謝冰心の留学生活を保障し、強力な保護者であった。そして、ボイントンの両親、兄弟姉妹の家族も彼女を世話し、守ったので、謝冰心は安全な環境に身を置くことができた。

ただ、アメリカという異国の中にいれば、違和感を持つ場面は必ずある。彼女

の作品の中に差別的待遇を受けたという記述はほとんどないが、アメリカ人の東洋への無知、無理解、ひいては差別に怒りをあらわにしたものはある。それが、謝冰心がアメリカ留学中に書いた「介绍一本书——《北京的尘沙》」(2)である。上記の通りボイントン家で読み始めたラモットの『ペキン・ダスト』を紹介しながら、当時の中国社会の問題を解決するための方法を謝冰心なりに示そうとしたものである。

本論文では、まず謝冰心の「介绍一本书——《北京的尘沙》」の中におけるラモットの『ペキン・ダスト』の引用箇所を確認する。そこから、ラモットの差別的な記述から彼女自身の東洋への見方を述べる。さらに、謝冰心が、弱国である祖国・中国が如何に強国に対峙すべきかについての考えを探る。これらのことから、謝冰心の考えが、当時の状況において、果たして従来言われた通り批判の対象になるものだったのかを探る。

1．エレン・ラモットと『ペキン・ダスト』について

エレン・ラモット(3)は、アメリカの看護婦、ジャーナリスト、作家である。ラモットは、1873年ケンタッキー州ルイビルの裕福な家庭に生まれた。1902年ジョンズ・ホプキンズ病院の附属の看護学校を卒業後、1910年から三年間メリーランド州ボルティモアの保健局で結核看護婦として働き始めた。

1915年にアメリカ初の従軍看護婦の一人として、ヨーロッパ戦線へ向かい、第一次世界大戦に従軍する兵士を看護した。ベルギーで、フランス野戦病院で看護に従事し、当時の恐怖と辛酸を極める体験を日記に書き続けた。その日記から主な場面を集め、1916年 *The Backwash of War* として出版した。しかし、著書はすぐに発禁処分となり、1934年まで再版されなかった。

この著書の出版により、ラモットは結核看護婦、従軍看護婦から、ジャーナリストの道を歩むことになったが、次に目を向けたのは中国の北京であった。1916年から17年まで、彼女は北京に滞在し、この時の見聞をまとめたものが先述の『ペキン・ダスト』であった。この著書は、同時期に来華した西洋人や中国人の使用人から見聞きしたもの、当地の新聞から得た情報や、実際に自らの目で見たものから構成されている。全編、手紙形式で書かれ、欧米列強の植民地主義に対する批判だけでなく、中国を始めとする東洋人に対する差別意識も満ちている。彼女の東洋への旅は、『ペキン・ダスト』を含む六冊の著書出版へと導いた。それらの著書には、*Civilization: Tales of the Orient*（1919）、*Snuffs and Butters*（1925）という小説集も含まれ、ラモットの東洋観を見る上でも非常に興味深い作品である。他の著作には、アヘン問題を告発した *Opium Monopoly*（1920）、*Ethics of Opium*（1922）、*Opium in Geneva: Or How The Opium Problem is Handled by the League of Nations*（1929）がある。

ラモットの小説作品は当時人気があり、それは時代の要請に答えていたともいう。さらに中国側からも評価され、1932年中華民国政府より、「林則徐メダル」が授与されたという。ラモットは、中国を始めとする東洋の詳細な状況をアメリカに伝えたジャーナリストとして、非常に重要な役割を果たしたと言えるだろう。

『ペキン・ダスト』は、1919年にニューヨークのセンチュリー・カンパニー（The Century Company）から出版された。本書は二部構成で、第一部は十三章から成り、1916年の10月と11月に書いた手紙の形式を採っている。第二部は、十五章から成り、1917年２月から３月に書かれた手紙の形式を採っている。その内容は、北京に到着するまでの船の中で西洋人の間で話された噂話、北京の街の光景に関する描写、老西開事件をめぐるフランス批判、アヘン交易やチベット統治の要求をめぐるイギリス批判が書かれている。そして最後には、当時の大総統であった黎元洪との会見も書かれている。

上述の通りそれでも『ペキン・ダスト』は、中国を紹介する書籍として欧米社会では人気があったという。そして、中国側からも評価をされた。ただ、本書の内容と全体に貫かれたラモット自身の考えとは如何なるものであろうか。それについては、謝冰心が「介绍一本书——《北京的尘沙》」で、『ペキン・ダスト』の数か所にわたる紹介箇所によって、見出すことができるだろう。次章では、謝冰心の文章と比較しながら、それを探ることにする。

２．謝冰心「介绍一本书——《北京的尘沙》」とエレン・ラモット『ペキン・ダスト』

この章では、主に謝冰心の「介绍一本书——《北京的尘沙》」におけるラモットの『ペキン・ダスト』の引用箇所を挙げていき、『ペキン・ダスト』とは如何なる書物なのか、この中に貫かれるラモットの東洋についての考えとは如何なるものか、謝冰心の眼を通した『ペキン・ダスト』を見ていく。

まず、謝冰心がラモットの著作を目にした時、彼女はこう語っている。

> 看见这本《北京的沙尘》（Peking Dust : by Ellen N. La Motte）是一位美国人在一九一六——一七两年游历北京的笔记。我以为又是万里长城和西山诸寺的赞美者，我虽已厌闻，但“北京”字样对我总能引起恋恋，姑妄看之！
>
> 我愈看愈惊心动魄，不能释手，自早晨十一时至午后五时，一口气把全书上下卷二十八章看完。释卷恍惚，天地异色。好个西人眼中的北京呵！“我实不德，于人乎何尤！”(4)

そして、謝冰心は、『ペキン・ダスト』の序文を取り上げ、ラモット自身の執筆の意図について、以下の通りまとめている。

作者在导言中说，平常关于中国书籍的写作，大概分两种：一种是作者只在中国过一夜，叙述一切，都有肤浅而有趣，文字中只充满了寺院中的铃声铎语。又一种是深知中国的作者，他的作品多半是属于教训的，叙述中国原始的学问，同时又使人觉得作者之不负责。他的这本书不属于任一种，唯一的和前者相同之点，或者是“不负责”。这书不过是汇集在北京时所听的飞语，这飞语也就好似北京的沙尘，向人吹去，偶然也会使人有一种感觉……(5)

上記の箇所に相当するラモットの原文箇所は以下の通りである。

Two classes of books are written about China by two classes of people. There are books written by people who have spent the night in China, as it were, superficial and amusing, full of the tinkling of temple bells; and there are other books written by people who have spent years in China and who know it well,--ponderous books, full of absolute information, heavy and unreadable. Books of the first class get one nowhere. They are delightful and entertaining, but one feels their irresponsible authorship. Books of the second class get one nowhere, for one cannot read them; they are too didactic and dull. The only people who might read them do not read them, for they also are possessed of deep, fundamental knowledge of China, and their views agree in no slightest particular with the views set forth by the learned scholars and theorists.

This book falls into neither of these two classes, except perhaps in the irresponsibility of its author. It is compounded of gossip,--the flying gossip or dust of Peking.……(6)

『ペキン・ダスト』の英語原文の中で相当する箇所は、かなり長く書かれている。だが、謝冰心は原文の大意を上手くまとめている。ラモットが序文で挙げたように二種類の中国見聞記から、『ペキン・ダスト』は外れるものであると、ラモット自身は述べている。それに対し、謝冰心は、第一次世界大戦の惨劇で傷を受けた欧米人士は、中国の広大な農村風景を目にして、中国の「無機」と「原始」を感じ取るとしている。さらに謝冰心は、欧米人士がこう考えていると述べる。

惊叹以为在如今机器贯穿的世界，还有中国国民这种无机的生活！以无机为和平之始，著起书来，拉扯上东方人和平人的哲学，中国也成了理想的国度！欧美战后的心身受伤的人，爱看这种书，偏偏懂得西文的中国人，也爱看这种书！(7)

謝冰心の眼には、欧米人士による中国へ見方が、非常に勝手で、表面的であると映っているようである。それは、欧米人士が中国国民の生活から、「無機」を見出し、東洋の哲学を引っ張ってきて、そこから平和の精神を見出そうとするという謝冰心による記述からも窺い知れよう。欧米人士は中国の「無機」から癒しを求め、この種の本を愛読し、西洋語を理解する中国人もこの種の本を愛読すると謝冰心は書いている。これも、中国人が欧米人士に受け入れられたとすぐに飛びつく軽薄さを批判しているのであろう。

謝冰心によるこうした批判は結局のところ、欧米人士が中国をどう見ようと、彼女が「与我们小百姓的生活之安全与否，是没有相干的！(8)」という通り、中国庶民の生活の安全とは関係ないことなのである。

こうした欧米人からの偏見と差別に満ちた見方に対し、以下の通り述べ、希望を見出そうとしている。

> 我们已被人玩笑得够了！这种书籍，不妨客气的接了过来，再不客气的丢在字纸篓里！多看这类容纵夸奖的话，是要使我们弛怠堕落的，何况这还是一片隔靴搔痒之言呢！豪富之家，还经不起宴安逸乐，何况我们贫穷到了无可再贫穷的地步，这种论调，岂容再放进门来，误我们的子弟？请看这本《北京的尘沙》罢！无论你看时有如何的不快与愤郁，而看后的奋发感慨，是于中国未必无益的！十个人看了，只一个人在心，我们已可满足！十朵花只结了一个果，而此一个果里的核，种下去还有生一新树的希望！(9)

この箇所では、むしろ差別と偏見に満ちた本を読み、憤慨することで、中国にとっても必ずしも無益ではなく、新たなものを生みだせると希望を述べている。これは、謝冰心の文章の後半で述べられる留学生とは如何にあるべきかという持論につながっていく。

さらに、謝冰心は、ラモットの『ペキン・ダスト』の第一章「可怜的老中国（POOR OLD CHINA）」のから以下の箇所を挙げている。

> 第一章“可怜的老中国”中，提到他未到中国之前，在舟中和一个同舟的英国人谈话，他问说，“欧洲各国怎样的要求安顿他们的势力范围，是向中国政府请问么？”英国人笑道，“我们才不请问呢，大家定规好了，选好了地点，只通知中国政府一声！”随后书中，他列表举例，自然句句是实话！(10)

アメリカ、日本を除く欧米列強にすっかり包囲されてしまった中国が如何に無力であるかを述べた箇所を挙げている。若いイギリス人男性が述べる欧米列強の横暴さについても、ラモットの眼を通して、謝冰心も同じく批判をしている。

そして、第一部第四章「种族的对比（RACE ANTAGONISMS）」について、謝冰心は以下の箇所を引用し紹介している。

> 第四章“种族的对比”，他问这个到日本游历的英国人，喜欢不喜欢日本。英国人说，“我不很喜欢日本人，他们与中国人比不了。总起来说，日本人是以常人待我们，中国人却以超人待我们”，——原文是（In Japan they treat you as an egual[sic], in China they treat you as a superior.）我译得不达意！(11)

この箇所に関して言うと、ラモットは、日本人が中国人より秀でたものとして捉えているわけではない。英語引用箇所は、ラモットではなく、上陸のための小舟に同乗した若いイギリス人男性（上記で登場済）の言葉であるが、自分たちが日本人によって対等に扱われることに不満げである。それは「I don't care for the Japanese; they don't compare with the Chinese.(12)」という言葉に現れている。

ラモットは日本人と中国人の欧米人に対する態度の違いについて、特に日本人の理由を歴史上辿った違いに求めている。

> Race antagonism all the way through. China is a conquered country. She doesn't dare show resentment or insist upon equality. Whatever her private opinion may be, she is helpless, and she must treat her conquerors with deference as superiors. But Japan has never been conquered by the foreigner. She is the only nation among all the nations of the Orient that has never been trodden underfoot by the European. She has never been subjugated and never been drugged.(13)

日本が、中国と違い植民地化されなかったことを最大の理由に挙げている。そのことが日本にもたらした恩恵について、ラモットは、次の通り述べている。

> And, curious coincidence, she has reached a level with the foremost powers of the world, and holds the rank of a first-class nation. All this without having had the blessings of European civilization conferred upon her by a conqueror! She has snatched here and there, has imitated, even excelled, certain qualities and propensities of the white man, but has never been blighted by having Western civilization forced upon her.(14)

日本が世界の一流国に躍り出たのは、ヨーロッパ文明のお陰であると強調している。しかし、日本がもはや欧米を脅かすほどの勢力を持っているとの恐れも抱

いている。日本、中国ともに、ラモットから敬意が払われることはない。

次に、謝冰心は、『ペキン・ダスト』第五章「勢力范围（SPHERES OF INFLUENCE)」を取り上げ、以下の通り引用している。

> 第五章“势力范围”，在述说各国在华的势力之后，他说现在有一段情景悉合的故事，有一大群各国的代表，在中国地图上寻找租界，许多中国官员也都盛服围着地图坐着。很大的地图，却涂上各种颜色，如红，黄，蓝之类。一个美国代表指着地图上有红色处向中国官员说“我们要在这里建作”，英国代表连忙插话说“对不起，你不能到那里去，这地方是属于英国的”，美国代表连换了几个地方，却都不能沾染，因为那是属于法俄等国的。最后美国代表回头向默坐不敢发言的中国官员说“中国的阴间在哪里？”——意思是说美国人只好占领中国的阴府！(15)

ラモットの原文の章題である“SPHERES OF INFLUENCE”とは、先に進出したヨーロッパ列強のことを指している。ラモットは、第五章の他各所でこの言葉を常に使っている。上記の箇所は、各国代表が、中国の地図を囲んで各勢力地を決めようとし、ヨーロッパ諸国が先に次々に植民地を押さえ、アメリカの入りこむ余地がないことを示す笑い話である。また、これは、中国進出においてはヨーロッパの国々の後塵を拝したことを象徴している。

ただし、「“中国的阴间在哪里？”——意思是说美国人只好占领中国的阴府！」という一文は、謝冰心の誤訳である。ラモットの原文は「“Where the hell is China?”」で、「中国は一体どこにあるんだ？」という意味である。余り上品な言葉ではないが、この時代にも言われていた俗語であろう。謝冰心が「アメリカ人が中国の冥府を占領するしかない！」と訳すのは、踏み込みすぎである。ただ、謝冰心がこの箇所を読んで、憤慨の感情が先んじたとすれば、仕方がないかもしれない。

次に、第八章の「顾问官与指导（ADVISERS AND ADVICE)」を挙げ、こう述べている。

> 第八章“顾问官与指导”，说到中国政府中的各国顾问官，从英国，美国，法国，俄国，日本，意大利，德国来的，只是指导中国以就死之路，为自己本国谋攘夺，将中国钉在贫弱无能的地位，以便易于控制。中国是自头到脚都锁困住，这是大家所共知的，在各顾问各自为谋的情势之中，政治的北京，是个宽阔的惨默无声的战场，表面上充满了东方化的礼让与国际交谊，而底下有个翻腾冲击的海洋！然而中国人对此还洋洋不理。末后他说，总之，中国人是太腐败了！(16)

ラモットの原文[17]を見ても、以前にも登場したイギリス人の若者から聞いて得た情報である。欧米列強が北京の外交の中心地を舞台に、如何にひどいことをしているかが窺われる。だが、それを受ける中国に対しても、ラモットは、「corrupt」という言葉で侮辱を加える。

この侮辱に対する謝冰心の憤慨は当然であるし、また事実、腐敗していた官僚にその怒りが向けられるのは納得のいくものである。

ここまできて、謝冰心も『ペキン・ダスト』の内容の酷さにうんざりし、紹介を諦めてしまった。謝冰心は、他の内容を簡単に述べながら、『ペキン・ダスト』におけるラモットの最後の言葉を引用している。

> 我不能再多举，我既介绍这本书，便不愿在此多占篇幅，诸位同学看的时候，如人饮水，冷暖自知！这书一直到底，“中国人总之是无能的”！“欧洲的被侵服者”等字样不一而足。不幸一九一六——一九一七又正是法国老西开问题，英国十二项要求，对德宣战等等，相继发生的时候，种种怯弱，种种无能，都被作者清清楚楚的看在眼里，要他不生轻藐之心，如何能够？幸而作者不曾久住，他在书末说，“我们就要离此巨大蛮野的北京城而去，这城中只是旋风般的飞语与飞扬的尘沙，对于这两样，我们都已觉得呼吸闭塞，我们要到日本看樱花去了。”[18]

老西開事件とは、1916年に起きた天津のフランス租界をめぐる係争事件であり、イギリスの十二項目の要求とは、チベット支配をめぐって、領地の提供を要求した事件である。そしてドイツへの宣戦布告とは、第一次世界大戦において、中国が1917年になって同盟国側に参戦したことを指す。

ラモットの目に映った中国と日本の差であるが、謝冰心自身もこの文章の直後に、「相形之下，日本当然得他的赞扬，我不嫉妒，而且承认，人家的进步真是飞速。只是中国以最古的文化，混了五千年，连日本都不如了！」[19]と認めている。ラモットの原文では、「So we are going to leave Peking, gorgeous, barbaric Peking, with its whirling clouds of gossip and its whirling clouds of dust. We are stifled by them both. We are going to Japan to see cherry-blossoms.」とある。この箇所は、ラモットにとって同じ侮蔑の対象である中国と日本のうち、美しい桜があり、欧米列強に支配されなかった日本の方がまだましだと思っていたことを示すのだろう。

ラモットの『ペキン・ダスト』において貫かれているのは、アメリカよりも先に中国に進出したヨーロッパ列強への批判と中国への侮蔑である。表面上は中国に対して同情を示しているが、ラモットが中国で目にしたもの、体験したものすべてに敬意を払うことはない。そして、ラモットは、日本に対しても中国への進出を虎視眈々と狙う競争相手としてみなし、恐れを抱いている。

杉山恵子氏はその著書[20]でラモットの思考の変遷を次の通り述べた。彼女の思考は、結核看護婦の経験から、「思考を規定してきた隔離の発想」を生みだし、アジア滞在の経験から「反植民地主義からくる現地人への深い同情」を抱くものの、白人と現地人の「混血は許せないとする人種差別の同居」をもった複雑なものとしている。特に「混血への恐怖」の原因として、杉山氏は、「奴隷解放後も黒人差別の激しかったアメリカ南部育ちのラモットの生い立ちも背景」にあると述べる。

だが、「反植民地主義からくる現地人への深い同情」に関しては、本論第二章で確認した通り、『ペキン・ダスト』の中には余り見られない。あったとしても、章題にある「POOR OLD CHINA」か、本書の冒頭に出てくる「Like most Americans, you have a urking sentimental feeling about China, a latent sympathy and interest based on colossal ignorance.」という記述ぐらいで、それも非常に浅薄な憐憫である。

この理由については、『ペキン・ダスト』がラモットの最初の中国に関する作品であったことが考えられる。ラモットは、1916年に初めて中国に渡り、西洋から見て異質な文化に驚愕の余り、軽蔑の念しか持てなかったのだろう。その後、阿片禁止運動にのめり込むうちに、中国を始めとする現地人のおかれた状況に同情を抱くようになったと考えられる。

では、ラモットの侮辱的な記述を受けて、謝冰心は自身や自国を如何にすべきと考えたのだろうか。次章では、「介绍一本书——《北京的尘沙》」に戻って見ることにする。

3．異文化接触の不幸な邂逅

謝冰心は、「介绍一本书——《北京的尘沙》」においてラモットの滞在期間が短く、「復辟」（1917年張勲によって清朝皇帝復位が企てられた事件）などの諸々の事件を目撃していないことを幸いだったと記した。しかし、ラモットの本には中国の民衆に関する記述がないことを憤慨している。そして、憤慨がこの文章を書かせた動機であり、この文章を同学に捧げたいと述べている。

謝冰心は、ラモットによる侮辱的な記述に対し憤慨した。その咎を当時の為政者に向けている。

> 三十年来的往事，足使我们对于政府和领袖失望了，无论如何的解说辩明，也不能使我们相信了！帝制不好，民国以来又有什么？保皇党不好，国民党又有什么？名流内阁不好，超然内阁又有什么？这系不好，那系又有什么？……盖造房屋，尚是从底下盖起，何况一个国家？我们真懵懂呵！[21]

さらに、不甲斐ない政治家を出してしまった原因として、謝冰心を含む民衆にも責を求めるべきとした。

> 如其说领袖误了我们，不如说我们误了领袖。不好的领袖，我们不能裁制驱逐，好的领袖，我们不能保护服从，与之同力合作。与其怪罪于领袖，不如怪罪我们自己。我们尽我们一分心，就是愿对于领袖，能尽裁制或服从之责，更愿为领袖制造环境，预备后盾。倘若在不意中，能制造预备出个领袖，则我们尤其惊喜！(22)

そして、「我们是默默然的从我们街头巷尾的张大哥，李大姐，秃儿，妞儿入手。彻底说是自我们自身起，渐渐的向外发展，我的弟兄姊妹，我的中表，我的朋友，我朋友的朋友……」(23)と主張した。一人一人市井の人々から始めていき、だんだんと影響が広がっていくことを期待した。

そのためには、一人一人が己の本分を知り、己の職に尽くさねばならないと主張する。謝冰心は、因果の説をもちだし、さらに持論を展開する。「我最信力学中因果之说，一举手一投足都能与大宇宙有关，一人在社会的因果的效验，比力学中之“力”更为显著。所以我是“个人主义”,“尽职主义”的崇信者」(24)と、社会の中の一部として、力を発揮することを主張した。この「個人主義」や「尽職主義」というのは、盛英も「冰心和宗教文化」(25)のなかで述べている通り、五四時代を代表する精神というよりは、キリスト教、特にアメリカのプロテスタントから影響を受けたものであろう。

キリスト教の影響を示す理由が、その後の文章に現れている。

> 不过做学生，书记，牧者等等似乎都容易，但加上一个“好”字，便不容易了！这是古今许多的人们，努力趋走的一个标门，但走到的人究竟还少。这其中需要人生观，需要哲学，需要爱的哲学。至此我以为我燕大同学向这标门趋走的人，至少已得个捷径，固为“宗教”解释给我们“为何爱’，而“教育”教给我们“如何爱”！(26)

良き人になり、社会の一部として、社会をよくするために必要なものは、人生観、哲学であり、さらに愛の哲学としている、そして、燕京大学の学生がそれを持ち得るに資格があるとしている。なぜなら、「宗教」によって「なぜ愛するか」、「教育」によって「如何に愛するか」を与えられているからである。この「宗教」とは勿論キリスト教のことであり、「教育」とはキリスト教に基づいたものを指すのだろう。

こうして、キリスト教を前面に打ち出してくるのは、1924年の時点で、謝冰心が深くキリスト教に傾倒していたことを表している。彼女の受洗は1922年10月(27)

であるが、後に「相片」（1934年）で描いたような教会や宣教師への不満はこの時は表現されなかった。

謝冰心が祖国・中国をよくするための提案として、次に留学生を持ちだしている。彼女自身は、ウェルズリー大学に入学して二か月ほどで、肺の病に倒れ、学問が身についていないことを恥じながらも、異国で学ぶ中国人留学生に注意を与えている。

まずそのために、謝冰心は、実際にウェルズリー大学の図書館で見たこと、アメリカで実感したことを挙げている。

> 至于旅居异地多受感触，这端我是质直的承认。美国多数人士对于中国国情隔阂得很，以学生为比例，美国学生知道中国的事的，的确比中国学生知道美国的事的，少的多多。中国高小的学生，没有不知道华盛顿，而美国大学学生，知道孔子的真没有几个。去年在威校我交一篇论文，论到孔子的哲学与中国的影响，全班同学没有一个知道孔子是谁的，为此教员特意叫她们到图书馆去看参考书，然而图书馆中关于中国的书也很少很少！(28)

アメリカの人々にとって、中国はほとんどなじみのない存在であり、中国の歴史や文化がほとんど知られていないことに、謝冰心は不満を覚えていた。この経験から、謝冰心も同じ留学生の立場から、「我脸上刺着中国，背上负着中国，中国的事就是我自己的事，当着无数异族人面前，我，我便是上下数千年，纵横数万里的中国！」(29)と自らも中国を代表し、中国の一部なのだという強い認識を持つに至った。

他の中国人アメリカ留学生に対して、謝冰心は、エリートを自認し、傲慢になることを戒めている。さらに、「留学生回国，不管实用如何，人人不屑做第二流人物，大家登到最高层上去，其如底下空壳般的地基何？」(30)と述べ、社会の上流を占めるばかりでなく、祖国の土台となる層となり、祖国を支えるべきだと訴えている。

これは、1910年代半ばから問題になっていた、中国人アメリカ留学生をめぐる批判的な言説に関わりが考えられる。謝冰心も、祖国を出る前に、上海での歓送会で聞いた講演の中から、そしてもっとそれ以前から知っていたのだろう(31)。派手な装いや遊びに夢中になる中国人留学生について述べながら、以下のように彼らに訴えている。

> ……如今是否我们讲究涂脂穿衣开跳舞会的时候。我们是从蓝衫国苦力群中来的，回到中国，一跳上岸，便须立刻再穿上蓝衫做苦力，只是要做个精明强干的苦力！(32)

もともと苦力の出身なのだからというのは大げさかもしれないが、国の末端、土台となって貢献していくことをここでも強調している。

こうした言説について、王炳根氏はその著書『玫瑰的盛開與凋謝』(33)で、以下の通り述べている。

> 「做個精明強幹的苦力！」這是冰心主張的最後落腳點。可見冰心不是沒有激憤之言。只是她的激憤最後落實到了每個人的個體身上。國民應該如何，領袖應該怎様，留學生回國後要如何践行，改造與振興中國，便是這様為好。冰心與革命者本質的區別在於，革命者喜歡振臂一呼，號召民眾，推翻政府，自己則成了民眾的領袖，而不是將自己置於改造與振興中國民眾的一員。

王炳根氏の言う通り、謝冰心の憤激はついには一人一人の中国人の身に向けられている。だが、この後には革命文学の面から批判に晒され始めるのである。

王氏は、その例として1925年に蒋光慈(34)によって書かれた文章を挙げているが、その後も文壇では謝冰心は批判された。その後、彼女は批判を受け入れ、階級意識を取り入れた「分」という作品を書くが、「お嬢さん作家」のイメージをぬぐうことはできなかった。

しかし、この「介绍一本书——《北京的尘沙》」を読む限り、キリスト教の影響は濃厚であるものの、中国人アメリカ留学生に社会の一員となり土台になることを呼びかけていることから、階級意識の萌芽が彼女の中にすでにあったと言えるではないだろうか。

さらに、王氏の言う通り、謝冰心は、革命家と違い、民衆を扇動したり、自らリーダーになろうとはしなかった。彼女の態度はむしろ冷静で、中国の改造と振興に努めようとしたのである。

おわりに

ラモットは、従軍看護婦からジャーナリストに転じ、中国を始めとするアジアをテーマとして見出した。『ペキン・ダスト』では、ただ表面的で、軽蔑に満ちた中国像しか描けず、中国の民衆とは個人的に交わり理解することはなかった。

謝冰心は、ラモットのそうした侮辱的な筆致に対し、誠実に受け止めた。さらに、当時強く影響を受けていたキリスト教に基づく「愛」の教育でもって、職務を全うし、祖国の土台となって、祖国を支えることを訴えた。彼女独自の「愛の哲学」でそれに対抗しようとしたのである。

一方、同じアメリカ人でも、謝冰心を同じ家族の一員のように迎えたボイントン一家とラモットの違いを大いに感じる。それは、ボイントン一家が北部出身、リベラルである会衆派の牧師一家であることとラモットが人種差別の残る南部出

身であることに理由を求められるかもしれない。

ただ、西洋と東洋の行き来が盛んになり始めた中で、差別のまなざしを向ける白人という強者とそれを真摯に受け止め、撥ね返そうとする弱者の構図は、まさに異文化接触における不幸な邂逅といえるのではないだろうか。

註

（1）本論文では*Peking Dust*の原文テキストとして、*Western Journalists on Japan, China and Greater East Asia, 1897-1956: Series 2 : Pioneering Women Journalists, 1919-1949 Volume 2,* Edition Synapse, July 2014を使用した。このシリーズは、原書影印本で、以下原文引用のページ数は、1919年発行のThe Century版*Peking Dust*のものに従い記載する。

（2）初出は、『燕大周刊』第48、49期（1924年10月11日）。原文テキストについては、『冰心全集二』、海峡文芸出版社、1994年、pp.241-250を使用した。

（3）エレン・ラモットの経歴とその作品については、杉山恵子『ジェシー・ターボックス・ビールズのアメリカ　写真が映し出した世紀末のアメリカ』「第三章　エレン・N・ラモット　北京を歩いた結核看護婦」（慶應義塾大学出版会、2011年）pp.101-125、“Ellen La Motte Collection”（The Alan Mason Chesney Medical Archives of The Johns Hopikins Medical Institutions, https://medicalarchives.jhmi.edu:8443/papers/lamotte.html,　最終閲覧日2019年6月9日）を参照した。

（4）これはあるアメリカ人による1916年から17年までの北京での旅行記である。私はまた万里の長城や西山の諸寺の賛美者だと思い、すでに聞き飽きていたが、「北京」という字に恋しさを感じ、一応読んでおくことにした！

　すると、読み進むほど私の心は揺さぶられ、手が止まらなくなった、朝の十一時から午後五時まで、一気に全書上下巻二十八章を読み終わった。読み終わると呆然として、世界が違ったように思えた。とんでもない西洋人から見た北京だ！「我実に徳あらずして、人に於いては何をか尤めんや！（私は徳がないので、他人に対して責められるだろうか！）」

（5）作者は序文の中でこう言っている。通常中国関連書籍の創作について、大体二種類ある。一種は中国で一晩過ごしただけで、すべてを語るかのようなもの。それらは皆浅薄だが興味深く、文章中にはただ寺院からの鈴や鐘の音に満ち溢れている。もう一種は中国を深く知る作者で、その作品の大半は教訓に属している。中国の原始の学問を述べ、同時にまた彼に責任がないと読者に思わせる。彼の本はどの種類にも属さない。唯一前者との共通点は、もしかしたら「責任がない」ことかもしれない。この本は北京で耳にした噂をかき集めたものにすぎない。この噂は北京の塵沙のようで、人に吹き付け、偶然にも一種の感覚を抱かせる…。

（6）中国に関する二種類の著作は、二種類の人々によって書かれる。中国で一晩過ごして書いた著作、いわば浅薄だが面白く、寺院の鐘の音に満ちている。もう一つは中国に数年住み、よく分かっている者によって書かれたもの、重い本で、完全な情報が詰まっており、重くて、読めない。前者の本は全く役に立たない。それらは楽しく娯楽的だが、読者は無責任な書き方だと思うだろう。後者は、その本を読まない人にとっては役に立たない。それらの著作は教訓的で、退屈だ。読むかもしれない人々はそれらを読まない。なぜなら中国の深くて、基本的な知識に占められ、作者の見解は、博学な学者と理論家によって示される見解と徳に全く一致しないのだ。

　この本は、恐らく作者の無責任さを除いて、これら二種類ものと違う。この本はゴシップ、飛び交うゴシップもしくは北京の塵を混ぜ合わせたものだ。軽く巻き上げ、人にその塵を

拭きつける。本物の情報ならば、国際政治をよく知る学生たちによって書かれた重い本になるだろう。

（7）今時機械が貫く世界で中国国民の無機の生活があるなどと驚嘆している！無機を平和の始まりとして、書き記していくと、東洋人、平和を愛する人の哲学を引っ張ってきて、中国もまた理想的な国家になるのだ！欧米の戦後の心身に傷を受けた人は、この種の本を愛読し、あいにく西洋の言語を理解する中国人もこの種の本を愛読するのだ！

（8）そう、少なくとも私はこう感じた。この本は最も率直だと。どの外国人が初めて中国に来た最初の感覚や感想を代弁している。彼らの感覚や感想も、私達中国庶民の身を切られるほどの苦痛であり、偉大な万里の長城、寺院の鐘や鈴の音である。荘老孔孟の哲学に至っては、中国がいにしえの国たる所以を完成させるに過ぎず、我々庶民の生活が安全か否かとは、関係ないのだ！

（9）我々はすでに充分嘲笑されてきた！この種の書籍は遠慮なく受けいれ、また遠慮なくゴミ箱に捨てるのだ！この種の好き勝手に誇張された話を多く読むと、我々は堕落してしまう、これはやはり隔靴掻痒の言なのだ！富豪の家はすでに安逸さに耐えきれないし、いわんや我々の貧困はこれ以上ないほど貧しいところまで来た。この種の論調は、もう受け入れることはできないし、我々の子弟を誤らせるのではないだろうか？この『北京の塵沙』を読んでみよ！読むとき如何に不快で胸いっぱいに憤りが沸き起こり、そして読後の興奮と感慨があろうと、中国にとって必ずしも無益というわけではない！十人が読んで、ただ一人の心に残れば、我々はすでに満足できる！十の花にただ一つ実を結べば、この一つの果実の中の種が、新しい木の希望を生み出すのだ！

（10）第一章「哀れな老中国」の中で、中国到着前、船上で一緒になったイギリス人との談話に触れている。彼（彼女の誤り、筆者注）はこう尋ねた「ヨーロッパ各国は如何に彼らの勢力範囲を確定するために、中国政府にお伺いをたてるのか？」イギリス人は笑って言った。「我々はお伺いは立てない。みんなが決め、地点を選んだら、ただ中国政府に一声かけるだけさ！」続けて本文中で、例を挙げている。勿論これらは実話である！

（ラモットの原文）

“How do the European nations acquire these 'spheres of influence' in China?” I asked. “Do they ask the Chinese Government to give them to them?—to set apart certain territory, certain provinces, and give them commercial and trading rights to these areas?”

“Ask the Chinese Government?” repeated the young man, scornfully. “Ask the Chinese? I should say not! The European powers just arrange it among themselves, each decides what provinces it wants, agrees not to trespass upon the spheres of influence of one another, and then they just notify China.”

“Just notify China?” I exclaimed. “You mean they don't consult China at all and find out whether she's willing or not? You mean they just decide the matter among themselves, partition out the country as they like, select such territory as they happen to fancy, and then just notify China?”（La Motte, *Peking Dust* pp5-6）

「欧州諸国はどうやって中国でこれらの「影響力の範囲」を獲得するの？」私は尋ねた。「特定の領域、特定の州を分けて、そしてこれらの領域に商業と貿易の権利を得るために、中国政府に依頼するの？」

「中国政府に依頼するだって？」その若い男は軽蔑しながら繰り返した。「中国人に依頼する？そうじゃないよ！ヨーロッパの大国は自分たちの間でそれを調整するだけで、それぞれが望む地域を決定し、お互いに影響を及ぼさない範囲に立ち入らないことに同意し、

そして中国には通知するだけさ。」

「中国に通知するだけ？」私は叫んだ。「中国にまったく相談しないで、中国が進んでするか分かるの？彼らは自分たちで勝手に問題を決定し、好きなように国を分割し、思った通りに領域を選んで、後は中国に通知するだけなの？」

(11) 第四章「種族の対比」、彼は日本を旅したイギリス人に日本が好きかどうか尋ねた。イギリス人はこう答えた。「私は日本人がそれほど好きではないが、彼らは中国人と比べ物にならない。つまりは、日本人は我々を人として扱うが、中国人は我々を超人として扱う」——原文は（日本では彼らはあなたを対等に扱い、中国ではあなたを上として扱うだろう。）

(12) 日本人がそれほど好きじゃないんだ。彼らは中国人と比べ物にならないよ。

(13) 人種的な敵対心がすべてなのだ。中国は征服された国だ。憤りを表したり、平等を主張したりはできない。国内世論がどうであれ、中国は救いようがなく、征服者を優越者として扱わねばならない。日本は外国に征服されたことがない。東洋のすべての国々の中で、ヨーロッパに踏みにじられたことはない。日本は征服されたことも毒されたこともないのだ。

(14) そして、奇妙な一致で、日本は世界の主流を占める段階に達し、一流国のランクを得たのだ。すべてはヨーロッパという征服者によって与えられた文明の恩恵のおかげなのだ！日本はあちこち機を窺い、かっぱらい、人の真似をし、さらには白人男性の一定の価値と性質を優越さえしてしまう。しかし、西洋文明が日本に迫っても衰退することはない。

(15) 第五章の「勢力範囲」では、各国の在華勢力を述べた後、彼は現在情景が一致する物語があると述べている。大群の各国代表が、中国地図の上で租界を探すと、多くの中国の官僚も盛装して地図を取り囲んで座っている。とても大きな地図は赤、黄、青といった様々な色が塗られている。あるアメリカ代表は地図の赤い箇所を指さしながら中国官僚にこう言った。「我々はここに作るよ。」イギリス代表はあわてて割って入って言った。「すまないが、そこは駄目だよ。イギリスのものだ。」アメリカ代表はいくつかの場所に変えたが、全く色づけられなかった。なぜならフランス、ロシアのものだったからだ。最後にアメリカ代表は振り向いて、押し黙っている中国官僚に言った。「中国の冥土はどこだ？（謝冰心の翻訳ミス、著者注）」——それはアメリカ人が中国の冥土を占領するしかなかったという意味である！

（ラモットの原文）

……So it went on all over the map. The Chinese officials sat silent, while one European representative after another stepped forward with his objections. Finally, in exasperation, the American turned to the silent Chinese and asked:

"Where the hell is China?"（Ibid. La Motte pp.48-49）

（すべて地図を囲み続けた。ヨーロッパ代表が他の者に続いて自分の抗議に踏み込んでいる間、中国官僚は黙っていた。ついに、アメリカ人が激高して、黙っている中国人に向き直って尋ねた。「一体中国はどこにあるんだ？」）

(16) 第八章「顧問官と指導」では、中国政府内にいたイギリス、アメリカ、フランス、ロシア、日本、イタリア、ドイツの各国顧問官は、ただ死にゆく道を、自国による中国簒奪を謀る方法として中国に指導し、中国を貧弱無能の地位に括りつけ、コントロールしやすいようにした。中国は頭から足まで鎖でがんじがらめにされたのだ。これは周知のことである。各顧問がそれぞれはかりごとをする情勢の中、政治的な北京は広大で悲惨なほど声なき戦場となった。表面上は東洋化された礼儀と国際的友誼に満ちているが、底では渦巻きぶつかり合う海が広がっているのだ！しかし中国人はこのことに対し全く構わず意気揚々としている。最後に彼は言っている、総じて中国人は腐敗しきっているのだ！と。

(17) I grow so tired of all this talk about the corruptness of the Chinese! They are corrupt, all

the officials, or the greater part of them. But you don't hear much about those who corrupt them. Why? Because it suits the great Western nations to keep this government in a state of weakness, of indecision, of susceptibility to bribes and threats; it makes China easier to control. …Diplomatic Peking is a great, silent battle-ground; on the surface Oriental politeness and suave political courtesies but underneath a seething sea of strife.（Ibid. La Motte pp.74-75）

（私は中国人の腐敗についてのこの手の話にうんざりしてきた！彼らは腐敗している、すべての役人、もしくは大部分が。しかし、彼らを腐敗させた側のことを聞かない。なぜ？この政府を衰弱の状態、罪のない状態、賄賂や脅威にさらされやすい状態にしておくのは、西欧諸国にとって中国を支配するのに都合がいいからだ。（略）外交（都市としての）北京は偉大で、沈黙を守る戦場だ。表面には東洋の礼儀正しさと政治的な礼儀があるが、闘争の渦まく海の下にある。）

(18) 私はこれ以上例を挙げない。すでにこの本を紹介した以上、ここで多くの紙幅を割きたくない。皆様が読めば、冷暖自知（自分で経験して分かる）、言われなくても分かるでしょう！この本は一貫して、「中国人はつまるところ無能だ！」「ヨーロッパによる被侵略者」などの言葉が随所に現れる。不幸にも1916年から1917年はちょうど老西開問題があり、イギリスは十二項の要求を出し、ドイツへの宣戦布告などがあった。立て続けに起こった時、様々な情弱さや無能さは、作者の目にはっきりと映っており、軽蔑心が生じないはずがない。幸いにも作者は長くは滞在せず、巻末でこう言っている「我々はこの巨大で野蛮な北京を離れようとしている。この街にはただつむじ風のような噂と巻き上がる砂塵があるだけで、この二つに我々はすでに息がつまるような思いをした。次は日本で桜を見に行こう。」

(19) 比べてみれば、日本は当然作者に称賛されるだろう。私は嫉妬しないし、それを認める。あちらの進歩は誠に飛ぶほどの勢いだ。ただ中国は最古の文化で、五千年混じり合った。日本ですら足元に及ばない！

(20) 上掲、杉山恵子、pp.114-120

(21) 三十年来の往事によって、我々は政府や指導者に失望してきた。どう言い訳や弁明しようと、我々を信じさせることはできない！帝政がだめなら、民国以来どうだったというのか？保皇党がだめなら、国民党はどうだというのか？名流内閣（1913～14年袁世凱が熊希齢に組閣させた内閣、筆者注）がだめなら、超然内閣（1912年６月袁世凱が陸祥徴に組閣させた内閣。表向きは何の派閥にも影響されない内閣と称した、筆者注）はどうだというのか？この派閥がだめなら、あの派閥はどうなのか？……家を建てるのは、やはり土台からである。いわんや国家をや？我々は本当に無知である！

(22) 指導者が我々を誤らせたというより、我々が指導者を誤らせたというべきだ。だめな指導者は、制裁を加えたり、駆逐したりはできない。良い指導者だからといって、我々は保護したり服従したり、協力することはできない。指導者を責めるよりも、我々自身を責めるべきだ。我々は少しでも心をつくすことは、指導者に取って、制裁あるいは服従の責を尽くせるよう望むことで、さらに指導者が環境を作り、後ろ盾を準備する望むことだ。もし知らぬうちに、指導者を出す準備をできるなら、我々はとりわけ嬉しいのである！

(23) 我々は黙々と市井の張兄貴、李ねえさん、禿男、娘っこから始めるのだ。徹底して言いたいのは我々自身から始め、だんだんと外へ向かって発展していく、兄弟姉妹、従兄弟、友人、友人の友人へと……

(24)「私は力学の中の因果の説を信じている。一挙手一投足は大宇宙と関係があり、ひとりが社会の因果における効果は、力学の中の「力」よりも明らかである。故に私は「個人主義」、「職責主義」の信奉者である。」

(25) 大约1924年，冰心在《介绍一本书——〈北京的尘沙〉》文章里 ，称自己“我是个‘个人主义’，‘尽职主义’的信奉者”，缘由正在于此。冰心信奉新教，还使她敢于在敬崇《圣经》的同时批评教会。（盛英「冰心和宗教文化」、『江苏社会科学』、2004年４月、pp.142-149）

(26) しかし、学生、書記、牧者などになるのは簡単なようだが、上に「良い」を加えると、途端に難しくなる！これは古今多くの人々が努力し突き進んだ一つの目標である。しかし到達できた人は結局わずかだ。このなかで人生観、哲学、愛の哲学が必要だ。ここに至り、私は燕京大学の同学で目標に突き進む人は、少なくともすでに近道を得ていると思う。もとより「宗教」は我々に「なぜ愛するか」を説明し、「教育」は我々に「いかに愛するか」を教えるのだ！

(27) 謝冰心の受洗については、拙論「ハーバード大学ホートン図書館所蔵ボイントン文書ならびに謝冰心直筆の書簡について」（『國學院中國學會報』第64輯、2018年）pp.65-92に詳しく書いた。

(28) 異国の地に旅するのは多く感慨を得たが、この一端は私が正直に認めるところである。アメリカの多くの人士は中国の国情にとても疎く、学生と比較しても、アメリカの学生が中国のことを知っていることは、中国の学生がアメリカのことを知っていることよりもずっと少ない。中国の高小（小学校五、六年生、筆者注）ですらワシントンを知らない者はいない。しかしアメリカの大学生は孔子を知っている者は数人もいない。去年、ウェルズリー大学に提出した文章で、孔子の哲学と中国の影響を述べたが、全クラスで一人とて孔子が誰だか知らなかった。そのため教員はわざわざ学生たちを図書館へ連れていき、参考書を読ませたが、図書館も中国に関する本はごくごくわずかだった！

(29) 私の顔には中国が突き刺さり、中国を背負っている。中国のことはつまり自分のことだ。無数の異人の前で、私、私は数千年、数万里四方の中国である！

(30) 人々は二流の人物になるのを潔しとしない。みな最上層に行ってしまうと、底が空っぽになってしまう土台をどうしたらいいのか？

(31) 謝冰心の1923年８月のアメリカへの出発までの状況に関しては、拙論「謝冰心のアメリカ留学——出発前の状況」（『千里山文学論集』第64号、2000年）に詳しく書いた。この中で、アメリカ留学生のために数団体が歓送会を開き、その中の講演で、アメリカ留学生の態度などに関する批判について言及がなされている。

　さらに、謝冰心は1920年に『去国』を書いている。これは、アメリカ留学を経て帰国した男性主人公が、中国に帰国後、培った能力を活かせる職に就くことができず、夢破れていく話である。彼女のアメリカ留学よりも数年前のことであり、留学の話もなかった頃に書かれている。しかし、彼女が当時のアメリカ留学生について聞き及んで書いたものと推察される。

(32) 今、我々は油を塗り、衣服を着、舞踏会を開くことにこだわる時ではない。我々は藍衫の国、苦力の群れの中から来た者だ。中国に戻り、一たび上陸すれば、再びすぐに藍衫を着て苦力にならねばならない。ただ堅強な苦力にならねばならない！

(33) 王炳根『玫瑰的盛開與凋謝』（台湾・独立作家出版社、2015年）pp.245-246

(34) 蒋光赤（蒋光慈）「現代中國社会與革命文學」（『民国日報』（覚悟）1925年１月１日）